

序

令和2年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから10年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、8年目の年でした。当センターは救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有しており、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、特定感染症指定医療機関として、極めて特徴的で重要な医療機能を有する高度急性期病院です。母子医療では市立貝塚病院と泉州広域母子医療センターを共同運営し、泉州の産科医療・新生児医療(NICU)の中核として極めて重要な役割を果たしています。また、関西国際空港の対岸という土地柄、当院は国際診療科を有し、国際診療分野でも全国的に著名な施設です。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、当センターへの外国人旅行者の救急受診も増え、大阪在住外国人の診療も増加していました。平成28年度末には国際診療の充実のため、国際診療科の新装移転を行い、平成30年3月から専門医師による国際外来を開設し、同年10月には外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の3回目の認定更新も行いました。

当センターは平成30年4月にDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群(大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院)に指定され、大阪府下でも極めて限られた高機能病院の仲間入りをし、日本医療機能評価機構から令和元年3月には5回目の病院機能評価の認定(バージョン:3rdG:Ver.2.0、一般病院2)を受け、令和2年3月にはNPO法人卒後研修評価機構(JCEP)による研修病院の認定を受けており、最近の病院機能の充実は大変喜ばしい限りです。

当センターでは泉州南部の病病連携・病診連携をより迅速にする診療情報連携システム「なすびんネット」を開設し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉佐野・泉南医師会の先生方との病診・病病連携をさらに活性化させるため、平成29年4月にりんくうメディカルネットワークを立ち上げ、地域の先生方との積極的な交流・情報交換を行ってきました。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)』では、臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践しており、この斬新な試みもあって初期研修医の人気も急上昇し、研修医枠も増えました。また、業績欄にも記載がありますように、多くの国内外での学会発表や英文・和文論文の業績も充実し、その量及び質は国内外の大病院に比べても誇れるレベルと自負しています。

南泉州地域では健診受診率が低く、癌や循環器疾患による死亡率が高いことが知られていますが、未病での予防医学を推進し、研究マインドをもって南泉州地域の特色を活かした事業を多彩に進めるため、平成30年4月より「りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)」を開設しました。本センターでは健診受診率を向上させ、生活習慣病や家族性高コレステロール血症などの高頻度な遺伝病の早期発見・治療を目指して、地域の保健師の教育や特定健診の指導等も行っています。

当センターでは消化器内科、眼科、呼吸器外科、放射線科等の一部診療科医師が不足していましたが、消化器内科4名、呼吸器外科2名、放射線科2名、糖尿病・内分泌代謝内科7名の体制となり、甲状腺センターも開設し、人材が充実してきました。当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備え、我が国に4つしかない特定感染症指定医療機関であり、新興感染症の防波堤という重責を担っています。令和元年末から世界に蔓延する新型コロナウイルス感染者の診療に関しても、我が国で先導的な役割を担い、重症・中等症の患者や外国人患者、新型コロナウイルス疑い肺炎患者を多数受け入れ、住民の命を守るため病院一丸となって対応してきました。泉州地域の高度急性期医療の中核病院として、今後も最高・最新レベルの医療を提供できるように頑張りますので、ご支援の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

理事長 山下 静也

序

平素よりりんくう総合医療センターの運営に多大なるご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

りんくう総合医療センターは、泉州南部唯一の基幹病院であり、全国に4か所しかない特定感染症医療機関に指定されています。また、泉州救命救急センターや泉州広域母子医療センターを併設し、加えて災害拠点病院や大阪府がん拠点病院などの広域で提供すべき政策医療を担う高度急性期病院です。これらの実績が評価されて、厚生労働省から、DPC特定病院群(全国156病院、大阪府下14病院)に指定されています。まさに、「地域医療の最後の砦」として機能することを期待されている病院です。

さらに、関西国際空港の対岸という立地上、大阪府外国人患者受け入れ拠点医療機関に指定され、外国人患者受け入れ医療機関認証制度(JMIP)の施設認定を2度更新しており、国際診療にも力を入れています。

また、平成30年には、りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)を設立し、健診・人間ドック部門を充実させました。大阪府下でも特に低い泉州地域の健診受診率の増進を図り、病気の早期発見、早期治療に結びつけるとともに、当地域の未病対策にも取り組んでいます。

令和2年度は、りんくう総合医療センターが地方独立行政法人化して10年の節目の年に当たり、地域医療支援病院として、高度急性期医療に加えて急性期医療後の後方連携の充実や在宅医療の後方支援の強化なども推進し、地域包括ケアシステムの構築においてもコミットする病院を目指したいと思っておりました

しかしながら、新型コロナウイルスの流行は終息する気配を見せず、第3波、第4波と進むにつれて一層の猛威を振るっています。この間は、COVID-19の診療と通常の診療を如何にして両立させるかにかのみ腐心させられたと言っても過言ではありません。

388床の中規模病院でありながら、感染症センターを有し多機能な医療を提供できるが故に大阪府からの期待も大きく、COVID-19の重症患者に加え透析患者さんや妊婦の感染者など広く大阪市内や北摂地域からの患者を受け入れてきました。大阪府の依頼に応じてCOVID-19重症病床を4床⇒6床⇒10床⇒15床と増床し、中等症病床も28床、合計で43床をCOVID-19患者用として運用してきました。

加えて、COVID-19患者の病床と診療スタッフを確保するために、約100床を休止せざるを得ず、そのような中であって、三次救急医療機関として脳卒中、急性冠症候群、多発外傷などの重症救急患者の受け入れや、当地域において当センターでなければ提供できない高度専門医療を、残された病床を有効に活用して継続してきました。

大阪府の医療提供体制は崩壊寸前の状況に陥りましたが、このコロナ禍においても、りんくう総合医療センターの職員は一丸となって、院内クラスターを発生させることもなく、皆様方に地域医療を提供し続けてまいりました。今後はワクチンの接種体制も充実し、コロナ禍が終息に向かうことを切に望みます。

皆様方には、大変ご不自由をお掛けしたことと存じます。この苦難の時期を共に力を合わせて乗り越えた暁には、りんくう総合医療センターのチーム力も一層充実し、当地域の病病・病診連携、さらには患者さんと医療者間の「絆」も強固なものになっているものと期待しております。

今後も、患者さん、当地域の医療機関の方々、そして我々りんくう総合医療センターの職員、皆が納得できる医療を届けられるよう精励していく所存です。

ここに令和2年度の病院年報をお届けします。今後も、ご支援のほど宜しくお願い致します。

病院長 松岡 哲也